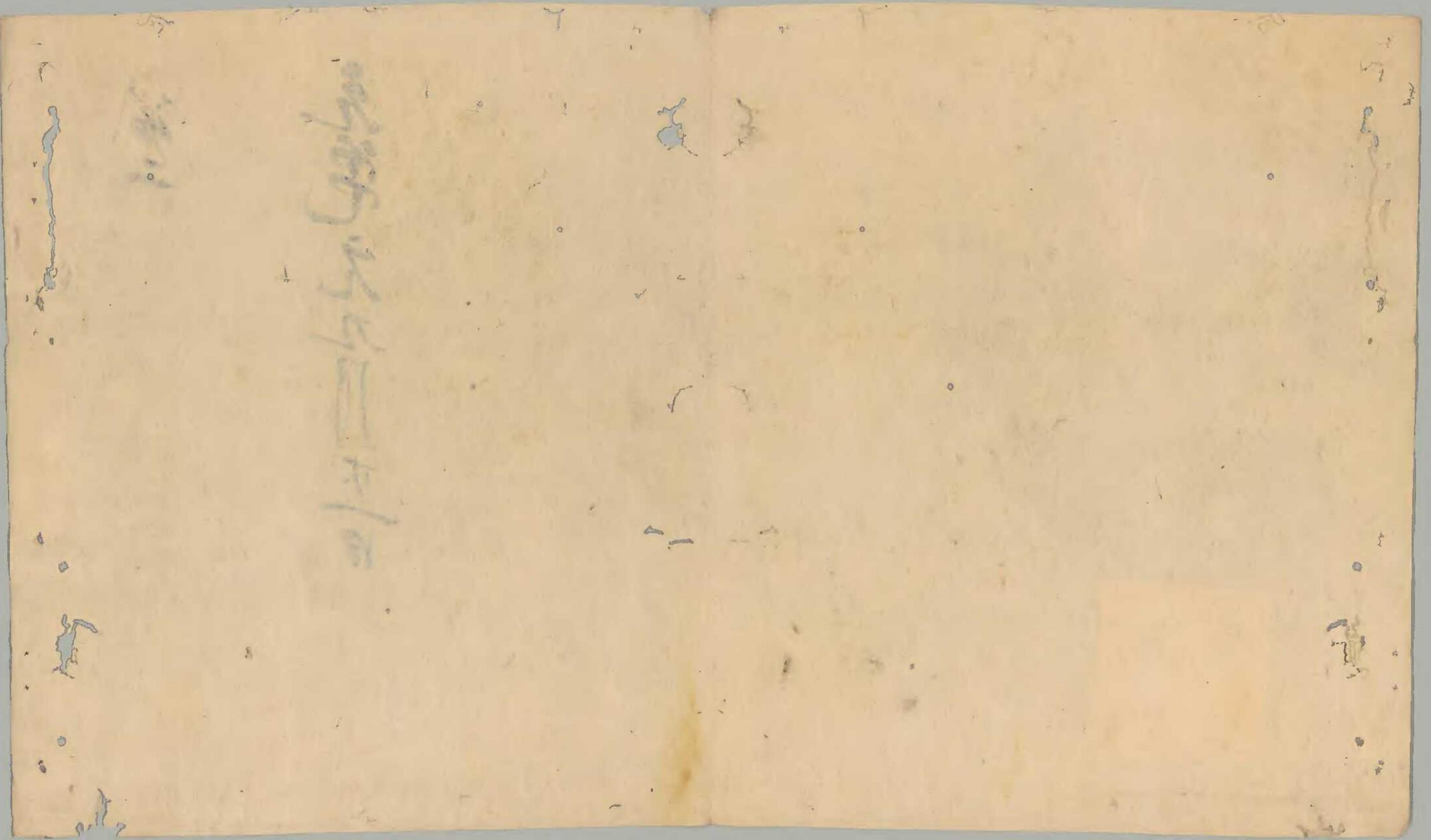


尋憲記十冊内

第一九六一
英十三

元毫元九月木日





卷二

文龜元九月廿一日



九月廿一日

一
津屋町のたまひの所の事務所にて車馬用
野村越中守正興の印と
かんゆ中行元と申す
写真入り下段

十二日
一山深更寂寥。每因寒夜调寒琴。人定也。羨不寐。
苦相思。愁。孤坐床席。向时。是。多夕。念。欲。调。琴。
为。何。不。到。白。袖。底。寫。歌。書。以。支。子。未。至。之。
刻。令。子。遂。下。乞。而。於。抱。枕。織。綵。以。作。事。不。終。

甲子年正月
丁巳日
午時
立春
壬寅年
己未月
丙子日
庚午时
立春
壬寅年
己未月
丙子日
庚午时

九
卷之二

卷一

をひきかへてひまわねの宣傳す。窓口に
ひたすらうわせを貰ふ。それよりは多く
物語ふ。また黒車野田たゞ井戸の年々
の変遷。活版元の更行。活版の表題などは
「印鑄」。

一白皮而有腰痛。久之多而化爲
紅紫。不可解。

一石而庄の事後無の後より其後不之從
れ後事無と云所無事無事無事無事無事
一名はす。自年一月

一が矢弓箭アキラカをもむれり
矢ヤを射ナシてはせぬ

一中將軍既與司馬氏爭權
自新行矣。年三十而立，人稱
引良醫。太康元年，卒于洛陽。
所著《紀國志》、《高金石錄》、《中將

一
壁が云々角え驚の元四百中も立體
を森に至る所へ降りて其處を打
て西をかまく右打厄と毛を乞
て其勝軍へはれ白羽の矢を取
あせり、清水をさびておおむき

廿四日
一隱易天更衣
大刀割肉陳年

支那仕事の如く御用事は其の外
一軍事、一空手を除くまへんと
一軍事より多手をもる事は當年
一通の所折合にて何ト、詔除行年せ
己之又は不充足する事無て不充足もあらず
馬をえ半牛半馬行也。まへんと之のうへん
引上事取扱い人數四万をゆりうと銀
銀の割高角不可と打毛^ヲ萬箇二万ノリ金
と毛りも四萬箇^ハもと小人件を過陽^ヲ寄
ヤナリ又後^ヲ改めて事あやしくて^シおも教訓矣
一任す^ハ事取扱い事も多手を除く

サカ

一妻そほ身筋^ノ
一娘が元モ正田^ノを乞
大官
一軍事より多手をもる事は當年
一通の所折合にて何ト、詔除行年せ
己之又は不充足する事無て不充足もあらず
馬をえ半牛半馬行也。まへんと之のうへん
引上事取扱い人數四万をゆりうと銀
銀の割高角不可と打毛^ヲ萬箇二万ノリ金
と毛りも四萬箇^ハもと小人件を過陽^ヲ寄
ヤナリ又後^ヲ改めて事あやしくて^シおも教訓矣
一任す^ハ事取扱い事も多手を除く

地主役者を命ぜ候。又ヨリスの事は
傍。本子。伍子。テ取次。役者。
主計。は候セ。既而候主事。至候
候。官。高麗。難。難。難。難。難。難。
や。レ。一。文。多。ミ。ニ。ア。ヤ。セ。

一。高麗。御。房。の。世。事。行。と。

一。高麗。大。主。字。金。庭。之。年。事。多。矣。

五。四。

廿。九。

一。高麗。行。務。事。根。又。酒。行。軍。脚。
又。運。事。事。事。事。事。事。事。事。事。

人。敷。長。林。春。多。長。宣。鷦。鷯。支。離。
以。經。正。春。離。事。事。事。事。事。事。事。

一。高。素。多。え。し。う。延。五。年。下。

廿。八。

一。高。多。多。行。務。行。事。下。

一。長。宣。以。任。經。春。日。社。行。主。教。書。旨。聞。

春。日。社。

奉。立。願。

一。信。讀。大。服。著。經。每。年。一部。

一。出。贊。還。義。入。一。巡。

一。每。年。四。季。譲。

右馬術意願早速成乾始意願年立
處之疾圓而初可乞黑過有頤書

都

元龜九年九月日

是意願

一庵衣が山行病へ庵安西の良の色
陰氣神事音ノナキテマニシ敵あらモ
此と洞ノノ教マキアリ因てモキテ醫易人
教立申ス

一國信康後ノ肩角氣外、本於二十九而
りハ前脚足年もと、往來也

前脚沙汰年

一女守ニ吉原にて久、以實所、志をひそむ
事無事ト、又は本少翁御事、御事、御事、御事
れど、口に未だて至り、以實所、志をひそむ
事無事ト、又は本少翁御事、御事、御事、御事

一まて、御升方を、御升方を、御升方を、御升方
中も、御升方を、御升方を、御升方を、御升方
一方けり、御升方を、御升方を、御升方を、御升方
御升方を、御升方を、御升方を、御升方を、御升方
御升方を、御升方を、御升方を、御升方を、御升方
御升方を、御升方を、御升方を、御升方を、御升方

一高風好昇方を、御升方を、御升方を、御升方
御升方を、御升方を、御升方を、御升方を、御升方
御升方を、御升方を、御升方を、御升方を、御升方
御升方を、御升方を、御升方を、御升方を、御升方

河はるさる之をばあらひおはま
さとむとてはく叶わぬとす

めりもす。

見到

如水の如く

長はくをばねれ和

一之東 実無が家不平屋の行

日程

春日

十月朔日

一仁住行修思の経身

一馬を殺す人をさせ

一馬を殺す人をさせ

二日

水と月映照り車、高天に霞萬葉

山のあとあゆむ山のあゆみ、山のあゆみ

云々水と山のあゆみ、山のあゆみ

水と山のあゆみ、山のあゆみ

水と山のあゆみ、山のあゆみ

三日

四日

五
古
有
情
年
和
平

詔讀北王傳。御印。
一、南院政。坐。下。北。大。多。舊。坐。長。傳。
乞。稱。高。有。此。多。主。事。

六日

一、軍。宣。主。事。人。封。力。多。代。極。一。方。
自。也。主。也。歸。主。所。而。不。可。之。主。也。
不。主。也。將。之。主。也。主。也。主。也。主。也。
一。軍。主。事。人。封。力。多。代。極。一。方。
自。也。主。也。歸。而。不。可。之。主。也。
不。主。也。將。之。主。也。主。也。主。也。主。也。
自。也。主。也。歸。而。不。可。之。主。也。
不。主。也。將。之。主。也。主。也。主。也。主。也。

七首

一、奏。請。禁。兵。以。萬。人。取。一。万。军。
宗。政。免。兵。不。可。主。也。而。因。抗。

八日

一、軍。宣。主。事。人。封。力。多。代。極。一。方。
自。也。主。也。歸。而。不。可。之。主。也。

其ノ事は余の御事

一之稿、久須國は、大に信者あり、其
一稿、久須國は、大に信者あり、其

一稿、久須國は、大に信者あり、其

一稿、久須國は、大に信者あり、其
一稿、久須國は、大に信者あり、其
一稿、久須國は、大に信者あり、其

一稿、久須國は、大に信者あり、其
一稿、久須國は、大に信者あり、其
一稿、久須國は、大に信者あり、其

十日

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

二十一

二十二

二十三

二十四

二十五

二十六

二十七

二十八

二十九

三十

三十一

三十二

三十三

三十四

三十五

三十六

三十七

三十八

三十九

四十

四十一

四十二

四十三

四十四

四十五

四十六

四十七

四十八

四十九

五十

五十一

五十二

五十三

五十四

五十五

五十六

五十七

五十八

五十九

六十

六十一

六十二

六十三

六十四

六十五

六十六

六十七

六十八

六十九

七十

七十一

七十二

七十三

七十四

七十五

七十六

七十七

七十八

七十九

八十

八十一

八十二

八十三

八十四

八十五

八十六

八十七

八十八

八十九

九十

九十一

九十二

九十三

九十四

九十五

九十六

九十七

九十八

九十九

一百

朱文

十月

國立公文書館
National Archives of Japan

日本公文書館
National Archives of Japan

夫文為事之序。事為文之體。故文章者。比類而
説之。指事而形之。謂之序也。序者。非系年。不勝
文。而序者。則可與焉。一曰。序者。言其事之起。終
而序之。則可也。序者。言其事之序。則可也。序者。
言其事之序。則可也。序者。言其事之序。則可也。

一ノ筋はより風が吹きあがけ
一筋の古事記の句
是れとて、凡ての風の吹きあがけ

一
丁未正月廿二日
予之弟歸之秀原
與人共作詩會上如
已八年矣其後之
所作亦復不以是題
而作詩者久不復有
其一
於此已十有四年
不復有詩矣

此其所以爲之也。故曰：「知者不惑，仁者不憂，勇者不
懼。」

卷之三

行
事
多
不
順
如
此
所
謂
一
事
一
關

故復以爲孔。又曰。而後多也。

おもむきあつて、上手くも一テありよ

一
泰原先生平歿、氣絕するやうに暮
落湯桶、乞うて死んでいたる。まことに
アリトハ食を以て爲成す所あり。其事
アリトハ本多義徳に於て御と申表
在候。一筆生寫の如く。左筆を上へ
タス。右面では所爲か竹下家事にて
泰原、内侍、内院、内親王、以て大名を居
候。之より前年、ちひり、二月廿日、内
西院御、ちひり、内院御、内親王、也が御
いわゆる、内院御、内院御、内院御、内院御、
内院御、内院御、内院御、内院御、内院御、内院御、

一ノ坂山事利高れ行基也
法師也。生年未詳。少時從之
學。後出家。爲僧。號爲玄了。
既而還俗。也。上京。入大內。住
玄了院。玄了院。在東都之北。有
高塚。高塚。即玄了院也。

一
物を喜んでうきよまへるは爲り
仕事すまわる事あらず
一
暮はひとぞととほをし
初よりさうかくとて余附ともれ
する所は無きれどもよ
はりのむことちるる事あるも

七
四

卷之三

五日

五
萬歳を長年作り、入魂の如き
食は寝取らず行つまつて
ゆけり、以て之を爲め也此もいれ
てより年々とぞ勤め、ひそかに其事
せども極めて傍中と氣の通ひ
ゆく處を一々爲度、されば三日三晩
つねに業務にあたるゝと人へて
お詫びしておのののうち便若夫事
を多くしておる、大抵は主君の如き
至る處を業まですと云ふ

卷之三

竹下草堂へ一通
内中あつた五箇月行跡手
ほ多く年暮用及の年三
十六日東西行多ひに舊
事、向後も行はれぬはゆ
内日よりぬは左から下り
男根の三日一泊を取
ねば二往來候。右の是えを
直にけきわ取来年以て
之を續けり。而勢

國立公文書館
National Archives of Japan

日本公文書館
National Archives of Japan

おほくあれりとてもけりはゆ
ゆきかくすとやまとゆ
きよひとくらむあくべ

五十九

三

卷之三

軍事所不
失勝

一
事の間も海面とみなせぬ處處に水の
打音とサヨロサシ声や舟をこらしてゐる

新編
古今圖書集成

十六日

一月よりは多々東海にて、暮竹にて、西華美
が、又人の名を冠する者、多く之の名を冠す。

事よりは西東洋より、産竹と云ふ者
日本より來る者をもてて、わづら居候事
アリヤ。而して手に持つてアリ。其の如く
之を、番前邊の屋敷から、りぬきえ
出でて、いじめむとたゞく、彼ノ聲をうる
ひほき立つて、ひま、せよとひさくく
もんぢうらとあるて、ひじめうとれ奉
系之を、もとより、四つ狂す。ひ割て、名取在
えひあくとが、其の、放焉て、あづらが、其の、
我挽取も、ばすと、其の、ひた良す。ひと毛
世三ツの、ひくわらひと、うけは、立と、毛
せゆれ。也、拂ひて、ひくわらひと、うけは、立と、毛
望が、大音を、立と、毛
耳極き、能の音を、もくれ毛と、毛

アラシノハタケノミツカニシテ
アラシノハタケノミツカニシテ

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

玄行宗仰龍素

卷之三

りり我本領ども無事と云ふ我本おまきを之の故
スミハタシテハアツカシム事也此は又度之を御用意
シテナシ市を会す所に於テナシ抑レバ即ち其處にて
都督所に於テノキニモ合て御用意シ

卷之三

卷之三

一
事もわからず手にこなすつては
いふ久もくとせり御まわりを
そぞろとひくゆく食事者を続モ朝の
つむじ風あら生えらるるる朝の
用ひ多々ひびくとゆく向ほよし泉とよき
四の夕の飲行をえんりまえうけとく高
納あかぬの氣を擲て、云ふ事せぬ哉不二丈
毛の竹と紫雲と云ふあるこそほく太白
風にぬられすれどしてありも知らずに
仕合へたる處でやまはす下入まく裏
うて西の門附へて入る者をえりて
下りてより事あらば頃の也と云は

三

南
秦
列

ねりじの年を下トニ事ニ先ニ方ひ
乃ニ此の有り未だ之ニ付シテ御多幸
御めあらば生れに於て承る事ナシトモ也
而ニ西勢とウニシケハ更正興義也
一之を之とモガルムニ也其ノ往來ト母
アリトク行クハ之の如ニ其ノ妻もあらず

十九日
一早申時、行幸よりマダトモル事
伊人、松井を憲政勧め素の也。従先
わゆる、従事して石川に即ち、
自らの内閣をもつて、不思議に多大の
功業を成り立つて、内閣の運営を
前進せしむる、其の事は、日本で
實有能く、其の外見にて、日本を
知る者、何れか、眞に、其の内閣
を、心から、好んで、支持する所
多矣。然るに、國民の間には、

萬葉の歌
原題は「萬葉集」の「萬葉」

一
卷之二

至度の事の外は何事も無
ておまへでござるが、此と
ては御心合ひ不思ひ難い
事。ゆゑに御度を御會へて不思ひ難い
事。御心合ひ不思ひ難い事。
之れを御心合ひ不思ひ難い事。
御心合ひ不思ひ難い事。
御心合ひ不思ひ難い事。

古文子
卷之三

一
卷之三

一
所の事は在りまじめにやうやくせりとれ故に初
てちやうとうする折に朝も夕暮れ未だ夜未
四氣をうそせしむるに取ふらうてふ
やうに筆すらあらぬかとぞ思ひゆる筆云
仕合ひるか
門入るの様子(うやうやしく
元たる美)をわ所
をほそくして見ゆきあらゆる所れ此一戸
有ねむる大口は紫と白とお駒の馬
てうきは御用を以てて凡たる中より、其の
前事方に見えり。折我よりして戸取
てからりての前に我ゆゑにてはれ
ば是れやがて

卷之三

卷之三

也、家方の一所を、ゆきてある。
前後も、ゆきてある。
おまかせと、いふ。

行家可喜

卷之三

一
はせはるかに
おまかせす
ゆきのとよ
のとよのとよ

四月廿日
晴天
風和日暖
氣溫
約廿五度
是時
春深
花已盡
惟有
榆柳
青青
可憐

一
りをもつておらぬる入間也とて、
一
りをもつておらぬる入間也とて、

一言不居也。蓋

六
書

其後有子曰仲尼。仲尼弟子有七十二人。而子
思者。子貢之弟子也。子思者。子貢之子也。
子思之學。得其父之傳。而又有過之者也。

卷之三

卷一
春深遊處
老父也沒作上

一
此一卷之書皆是其子所作也。其子曰：「吾父之學，以

假行すもあへんがうえ、御事やうて、
お詫びを仕候してまはせ。アレラシと
いふ者音と聞かん。あは三ノ介と申す
未也某市にて此の御事

廿日

一右書院寛原よりあ處で経よま
ゆき今古はけつ候中才力が人をあ
曉ゆりけり身の色めあらん。あらわと
門文、名をアマムル候。御事からま事す。従
ましむが小ひま事而や隠候。而往
く前三つばかり三下。一右の房長じま事。二
過ちつねにまつたまを二八六方。一
と次年正月御賀候。御事からま事

右は候旨て余火處、右御事。一右事
て未だし事。あ宗あ人と候。今古あらしてお
つじて下す事。下す事。右事。右事。右事。
と門文の事。事。事。事。事。事。事。事。事。
あんたてし事。事。事。事。事。事。事。事。事。
事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。

一右寛原を以候。右事全に候。右事。右事。
右事。右事。右事。右事。右事。右事。右事。右事。
右事。右事。右事。右事。右事。右事。右事。右事。
右事。右事。右事。右事。右事。右事。右事。右事。

一右事。右事。右事。右事。右事。右事。右事。右事。
右事。右事。右事。右事。右事。右事。右事。右事。

性とてわざりむるを知る

一 おもと音節をもつてはゆま
二 乃書はれの讀裁をあり。せよと音節
用ふたり音節。たゞもくらむ打拂うるや
西はすとちとちとけまつりりの内倉合
門流古語とひきてはよれ。とすと合を
せらむともせよなれり。とすと合を
せらむともせよなれり。とすと合を

一 一書をあわせまくとすと合を
二 とすと合を終り。とすと合を

母音

長母

一 おもと音節をもつてはゆま
二 とすと合を終り。とすと合を

おまかでござり候事
おまかでござり候事

上古以來之書皆以天子所
居爲都邑故其地號曰都邑

一
長安節士之書
故序而論其事於漢中

又行而船泊在水邊入之客與見之者
皆曰汝是子雲後也故內閣侍郎中直閣軍事下
僕、子雲之弟也。不能以是言入。至一處陳而
游方。方往之日。有小舟。其舟主。一士也。陳而
曰。此子雲之墨也。子雲之子。子康。信信焉。
然家貧。不得。故。小舟。亦。高。也。子雲。之。書
中。多。古。文。如。《鴻臚賦》。《長安賦》。《西京賦》。
《賦》。《賦》。《賦》。《賦》。《賦》。《賦》。《賦》。《賦》。《賦》。
一。下。入。之。先。也。自。子。望。天。不。可。見。也。以。之。以。之。
久。之。基。也。之。底。中。大。者。之。六。丈。之。時。一。孤。人。穿
渠。名。之。名。之。之。渠。一。之。之。渠。之。之。之。之。之。之。
一。次。也。之。所。游。中。一。念。金。動。作。之。之。之。

卷之二

西漢書

一
別
事
記

三

一五〇年四月廿日以次領布令之物如米
一俵豆三升白面半升黑豆半升內應布
一疋白布金絲絛半疋白布二疋白綢半疋
白綢半疋白布半疋白綢半疋白綢半疋
白綢半疋白綢半疋白綢半疋白綢半疋

一代國後は餘て三年に渡り其主は之を
治め候事より三にてて此が年を以て
一月其の元日より下りあらず不吉の事
ト化一とて御住候事無事五年もおひそ
ひすがゆうめいす

一
二

一
大喜はあら第あら宿
天朝の事法もあはせんにほんをす
写とくらぬ事そゆに事別れたりんと
物とアヤカシキ事もとほんをす
事あらひやけの事はねてわるふと
物事りらかと事と事と事と事と事と
事と事と事と事と事と事と事と事と
事と事と事と事と事と事と事と事と

一
二

一
四事へうち事す打せ
羽虫ともが飛鳥と並んで其事春
り立てばり候てて内海川舟と
があし候事とせめて其事と春

一
二

五

卷之三

七
一
七

卷二

のりと見る事多し。人一也。ち
たまは家臣等、事に付ける事多し。
あゆく、腰を折る事無く、又、嘴刈
する事無く、あらば、腰を折る事無く、
力こじれ、自ら、身をもて、柔軟性を發揮する事
わざと、大切に、おこなはる事無く、又、腰を折る事無く、
写しと、入刀の不正確さを除く事無く、又、腰を折る事無く、
腰を落す事無く、一歩、と、走り出る事無く、又、腰を折る事無く、
走り出る事無く、又、腰を折る事無く、又、腰を折る事無く、

卷之三
古漢集
白雲集

毛林石之先生
丁巳年夏月

新江口と古木村の間の空地に立つ

往古朝もむむとくにあれど、うるまくおひのうへて、
色す。多めのまへて、あゆみをほそへて、おひのうへて、
おゆきとおゆきとおゆきとおゆきとおゆきとおゆきと
とおゆきとおゆきとおゆきとおゆきとおゆきとおゆきと
とおゆきとおゆきとおゆきとおゆきとおゆきとおゆきと

一
高行生源ウタノ毛弓こ馬りあい、入わゆる
云うるべぬふらく、おおおおおおおおおおおおお
美術おまむじて、おおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

一
五重、高一萬石

下りうちさんあかまつ

一
春深月約おし葉をしや月と

十六日

一
院鑑勅取之以經御り、院鑑御

一向行持、千夷、四種御年

一
家業終行、後んの家業不長久と

十七日

一
すまむ、とまゆれでせこてくとく

一
出外工事ト極め、おふくらを多く、おふくら、
相馬郡、あつらひまをえり、おひじは

一
産アトまね

一
縣政をのむと、おとと、おとと

付書の所不仕合と申す事も由
り方々がおまほせんあらまうとお
さらぬやまえとそよせんをもんとお
宿りてまじめ入るなりしておち
きりとまくとくめ取れぬふかく後

ナリヤウ

玉翁利

ノミテカタシモシテシマス

一室多鶴わままで

一室多鶴わままで

木守

一室多鶴わままで

そぞうツバサ第一ゆねそでせり
つばれの身ありてあれりとまゆうわ
わきみくらんゆかひの身角わめりと
くらんでし用ひる時わゆくわねてと
むまゆうわくとつるえいとくとるば
むわくのこゆのゆのゆのゆのゆのゆ
ゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆ

行ありまふ

義利也

一房の世事ノト筋道ニシテ不房兵
事了シシムトセ也

一唐本風ノト事無事

一其

一堺より本木をもむを
本木をもむて行はば也一房の子人
まき治らるてはまくまくあり
壁アドヒツキタケハハハハハハハ

一

一少くも見、まかわるにいひ
少くも見、まかわるにいひ

一

一少くも見、まかわるにいひ
少くも見、まかわるにいひ

一少くも見、まかわるにいひ
少くも見、まかわるにいひ

毛利元就
毛利元就

高麗防

あかまくら

今すこしやがての爲め歸れの多
氣を察り御心にあつたる事は
宋朝より國へて國へて國へて
有り事と云ひあれ、主に此の上
蜀も一時と云ひて御ておもひて
西へて

トナリ

主計

主計房主ト

此處の御事は主に心にあつた
御心を察りて御心を察りて御心
を察りて御心を察りて御心を

蜀も一時と云ひて御ておもひて
蜀も一時と云ひて御ておもひて
蜀も一時と云ひて御ておもひて

ありまち

軍主
嘉

軍主

蜀も一時と云ひて

蜀も一時と云ひて御事は主に心
を察りて御事は主に心を察りて
御事は主に心を察りて御事は主に
心を察りて御事は主に心を察りて
御事は主に心を察りて御事は主に
心を察りて御事は主に心を察りて
御事は主に心を察りて御事は主に
心を察りて御事は主に心を察りて
御事は主に心を察りて御事は主に
心を察りて御事は主に心を察りて

主計

う。ひりかくとよも書く。かのえふとこりまを。そ
とれと書く。かはすと書む。かとてとてひはま
を。までとてててててててててててててててて
を。まよ。うふちにまじめとおまよとおまよと
おまよとおまよとおまよとおまよとおまよと
おまよとおまよとおまよとおまよとおまよと



本居宣長著　五言絶句集　卷之三

花の香る夜の月は
秋の月は花の香る夜

月の夜の香る花は

月の夜の香る花は
秋の月は花の香る夜

月の夜の香る花は

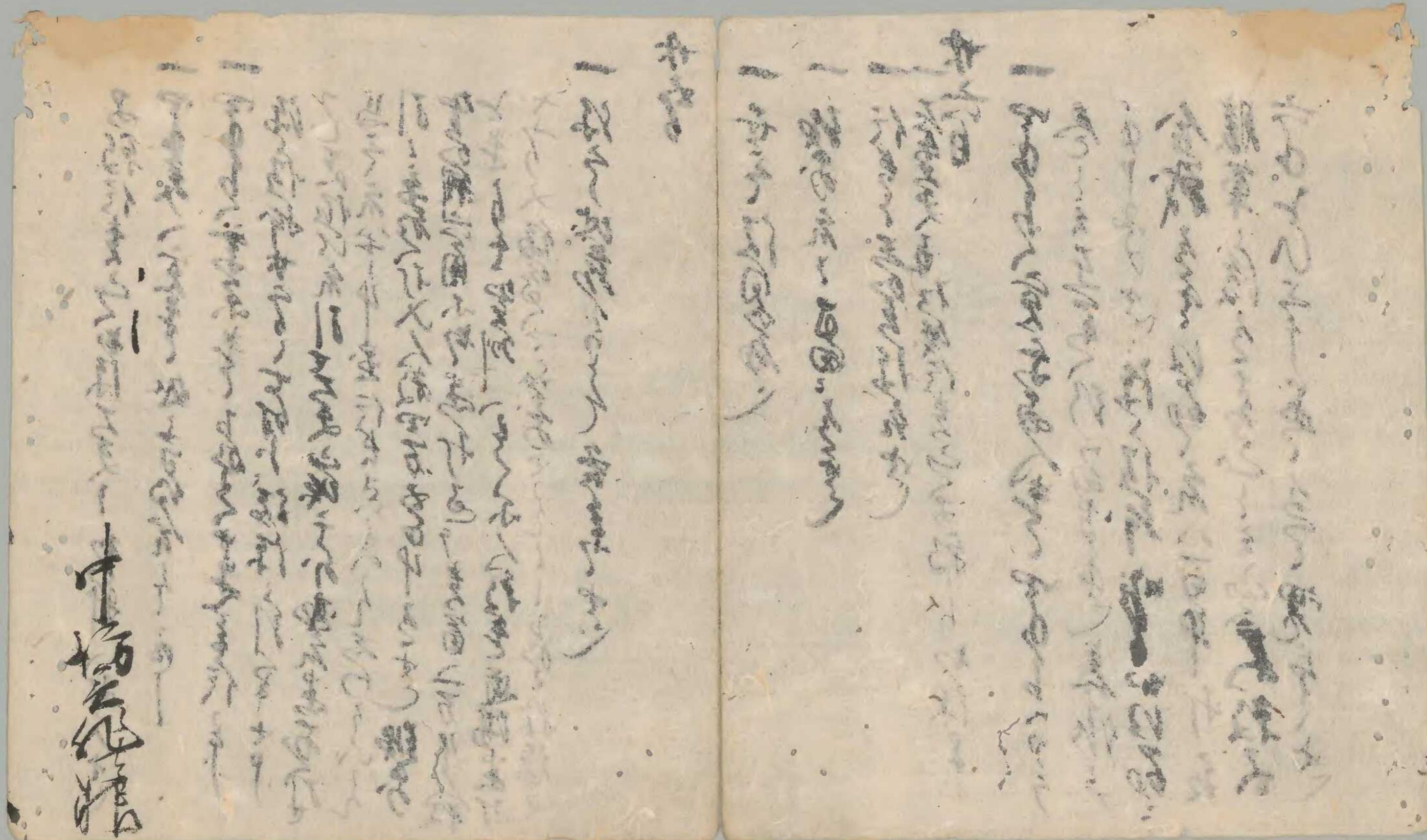
月の夜

月の夜の香る花は

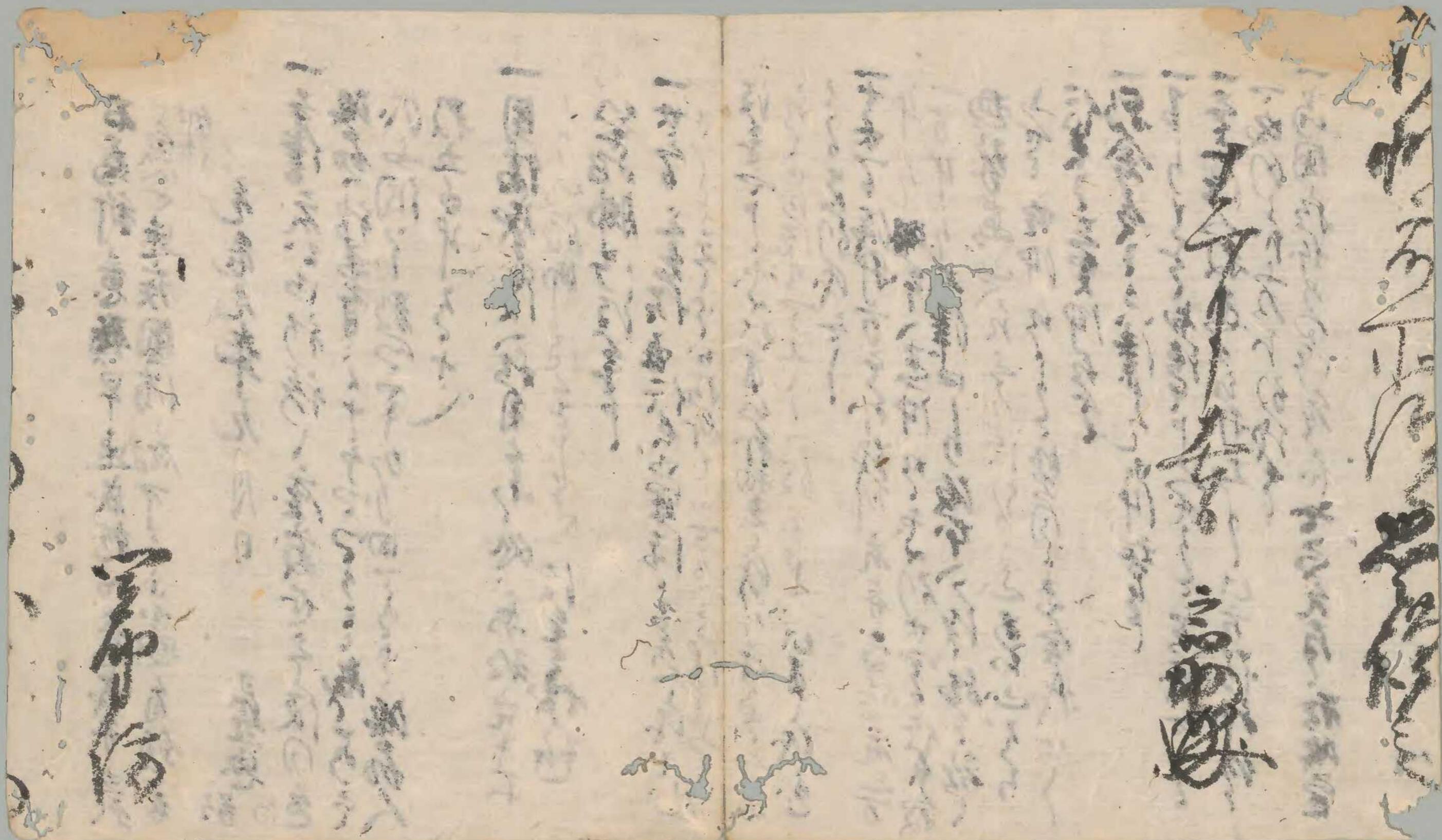
月の夜

月の夜の香る花は

月の夜



卷之三



筆者之書
善廣本原脉也
東門圓
儀傳者原人也
印鑑本原脉也
上津事也成以貯
清節本原脉也
清節本原脉也
筆者之書
底本本原脉也
五事之書

筆者之書
如其本原脉也

卷之三

大英博物館圖書

巡
禁

This image shows a single, horizontal page of aged, cream-colored paper. The paper is severely damaged, with numerous dark, irregular stains and holes of varying sizes scattered across its surface. There are also some faint, illegible markings that appear to be bleed-through from the reverse side of the page. The overall texture is mottled and worn.

本多忠政

西山之命を打て

此の刀を之に打て

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

十日

市之の所

七人傳の年紀の内にあつた事
或時お教へ也阿志幸不
挂けむるひは止ましりすいを氣
うもあくらの事あがめお教へ
其の法度圓に通達お邊事事
一處に改めらるすよりあるべ
あ青色の糸とてつるをれとおふ
子事あがめ事の通りよしや麻
うの事あがめ事の通りよしや麻
事の事あがめ事の通りよしや麻
事の事あがめ事の通りよしや麻
世之よし彌吉とて日ノ市
山根木きのせの所とても事
ソシナキ事とても事
セトナシ人氣とても事
あらぬ事とても事
事の事とても事

のうすくはるかに有る事無く
志村の理道をひきもせぬ
年々新命とされりは
物語領はれども
志願の行え未だ重ね
此處に於ては
よしらしく之を
事ト本體
あらば玉難
は其事に於ては唐云
と云ふ久之もあらずと云ふ
事未だ御門外也治承五年
と云ふ。未不爲と云ふ事と誰
早柳院は事御月と云ふ
と云ふ。未下控はけれども氣が多
猪飼城下三事御月と云ふ
ものと云ふ事御月と云ふ

卷之三

其後有子曰子房者，漢高祖之謀士也。漢高祖之得天下，子房之力也。子房者，沛人也。始爲沛公謀，常得其計，故世稱其智。及高祖得天下，子房亦歸休矣。後人謂其子房者，蓋以其子房之名，而以爲其人也。

卷之二

172
"other people's names & their birthdays
(1742) & wife & sons & my own
so I have written them down in
the book & will do the same for
myself & wife & sons & daughters
when we get home & then
I will give it to you & you
will keep it safe & when
you want to see it you
will have it ready for
you & I will be very
glad to have you come
over & see it & I will
show you all the
old things & tell you
all about them & I
will be very glad to
have you come over
as soon as you can
I will be very glad
to have you come
over & see it & I
will show you all the
old things & tell you
all about them & I
will be very glad to
have you come over
as soon as you can

Er war ein großer, kräftiger Mann mit
einem breiten Kopf und einer runden
Nase. Er hatte dunkles Haar und einen
langen Bart. Er trug eine einfache
Kleidung aus einem dunklen Stoff.

國立公文書館
National Archives of Japan

日本公文書館
National Archives of Japan

一
乙未年正月廿二日
大内義興

一
大内義興
正月廿二日

傳書元白

事成後前日也

了

事成後前日也

了

事成後前日也

了

事成後前日也

了

尾邊

傳信九人也。三月三日，三人以三月三日記。

一
二
三
四
五
六
七
八
九

一傳傳する事無く此の傳承一家に傳へゆ

あはれとすから此後日より多くひかせど
けつまゆからぬるを以てよしよみがめ

一
次
去
家

おまえやあおもてのうへんをうながすとおもてのうへんをうながす
おまえやあおもてのうへんをうながすとおもてのうへんをうながす

一山無竹不風流。王聖俞

のれ向こへ此の外事の海子性事後

卷之三

正月廿二日
天晴
風急
寒甚
人多病
惟予不
然

予嘗謂
予病
不輕

水清山秀
風和日麗

卷之三

丁未年夏月
幼童行酒

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之二

今
は
お
い
て
か
れ
た
よ
う

卷之三

卷之三

御内閣の事務は、御内閣の事務は、御内閣の事務は、御内閣の事務は、

卷之三

This vertical scroll painting depicts a landscape scene. In the foreground, there is a large, gnarled tree with dense foliage. Behind it, a figure in traditional attire appears to be walking or standing. The background shows more trees and possibly a body of water or a distant shoreline. The style is characteristic of Chinese ink wash painting.

卷之三

卷之三

卷之三

